

令和 元年 6 月 13 日現在

機関番号：17501

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2018

課題番号：15K12418

研究課題名（和文）アクティブシニアによるICTを活用した社会貢献および学習共同体の形成モデル

研究課題名（英文）A model for social contribution and learning community using ICT by active seniors

研究代表者

竹中 真希子（TAKENAKA, MAKIKO）

大分大学・教育学研究科・教授

研究者番号：70381019

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、アクティブシニアで構成されるグループが、ICTを活用した社会貢献を実現・展開する過程を明らかにし、グループが学習共同体としてどのように機能しているのかを検討することであった。自己のスキルアップを目指した月1度の勉強会においてメンバーが相互作用しながらICTリテラシーの向上を図っている点においては、「高齢者－高齢者」による「学び－教え合い」の成功事例を捉えることができた。一方、社会貢献活動のモデルや活動を通じたICTリテラシーの向上については、他者に教えることが自己の学びになるという意識には結びつきにくく、「高齢者－高齢者」による「学び－教え合い」の課題を示す事例となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、超高齢社会、高度情報社会におけるアクティブシニアのICTリテラシー向上と社会貢献活動を通じた自己実現のあり方を示した。

アクティブシニアが能動的な主体となり自主的に組織するグループにおいて、ICTを活用したボランティア活動などの社会貢献活動をどのように実現・展開させていくのかという実践的過程、および、グループの学習共同体としての機能を検討した。メンバー内での勉強会では、相互作用しながらICTリテラシーの向上を図っていた。しかしながら、ICTボランティアなどの社会貢献活動を通して、他者に教えることが自己の学びになるという意識には結びつきにくく、活動の継続の困難さが浮き彫りになった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify the process by which a group composed of active seniors realized and develop social contribution using ICT, and to examine how the group functions as a learning community.

In terms of improving ICT literacy while interacting with members in a study session once a month aiming to improve their skills, we were able to capture the success stories of "learning - teaching each other" by "the elderly - the elderly."

On the other hand, the improvement of ICT literacy through the model and activities of social contribution activities was difficult to relate to the consciousness that teaching to others would become self-study. It became a case to show the problem of "learning - teaching each other" by "the elderly - the elderly."

研究分野：教育方法

キーワード：アクティブシニア 社会貢献活動 ICTボランティア 学習共同体 ICTリテラシー 生涯学習 タブレット

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 平均寿命が 80 歳を超え、少子化による人口減少と相まって、超高齢化が進む我が国は、労働人口の減少、医療費の増大、コミュニティ意識の希薄化などの課題に直面している。一方、65 歳以上の高齢者の 8 割は健康で自己実現に積極的なアクティブシニアと呼ばれる元気な高齢者であるといわれている。このような時代背景の中、総務省では平成 25 年 5 月に「ICT 超高齢社会構想会議報告書 - 『スマートプラチナ社会』の実現 - 」を公表した。それに続いて同省においてスマートプラチナ社会推進会議が組織され、スマートプラチナ社会の実現を早期かつ着実に図るための成功モデルの提案や展開方策などが示された報告書が平成 26 年 7 月にとりまとめられた。これらの報告書では、スマートプラチナ社会の実現のための一つのプロジェクトとして、高齢者の「ICT リテラシーの向上」が掲げられている。

(2) 前述のスマートプラチナ社会推進会議とその戦略部会がまとめた報告書では、スマートプラチナ社会実装加速モデル、同社会深化モデルの段階的な促進モデルごとに具体的な 12 のモデル(実装加速モデルとして 5 つのモデル、社会進化モデルとして 7 つのモデル)が提案されている。それらのうち「ICT リテラシーの向上」以外は全て、アクティブシニア自身ではなく産学官などが主体となり、実現へ向けた技術開発や体制強化が前提とされている。例えば、ウェアラブルセンサーの多様化・高性能化に向けた開発、服薬管理・健康管理などを司るネットワークロボットの開発、アクティブシニアが活躍できる就業環境の整備などである。これらのモデルではアクティブシニア自身は受容者であるが、「ICT リテラシーの向上」においては、公民館、学習センターなどで実施される講習会で ICT に慣れ親しむだけでなく、「学び-教え合いによる自己実現」としてのボランティア活動、就労、起業といった社会参画に繋げることが想定されている。ここではアクティブシニアは能動的な主体である。

2. 研究の目的

(1) アクティブシニアの「ICT リテラシーの向上」がいかに図られるのか、彼らで構成されるグループを対象に、ICT ボランティアなどの社会貢献を通じたグループの学習共同体としての機能について明らかにする。

(2) アクティブシニアで構成されるグループが、ICT を活用した社会貢献を実現・展開する過程を明らかにし、知識や経験を地域へ還流させる仕組みについて考究すると共に、グループが学習共同体としてどのように機能しているのかを検討することで、「学び-教え合いによる自己実現」のモデルケースを示す。

3. 研究の方法

(1) アクティブシニアの ICT を活用した社会貢献の実践的過程について明らかにするため評価・分析の枠組みとして、理解力・技術力の向上と自己実現の度合いを設定した。

(2) アクティブシニアの ICT を活用した社会貢献を通じた学びを明らかにするため、アクティブシニアで構成されるグループの社会貢献活動や勉強会を参与観察した。

(3) 本研究の対象とする期間は、2014 年 4 月から 2019 年 3 月である。2014 年 4 月から 2019 年 3 月までの勉強会の報告書として作成された日誌(図 1)とビデオ記録を用いて研究を進めた。

(4) 研究の対象は、ICT を活用するための勉強会を自主的に組織する 60 歳以上のアクティブシニアで構成されたグループである。このグループでは、2013 年 11 月から、自己の ICT 活用のスキルアップを目的として、タブレット端末やスマートフォンの利用、SNS の利用、情報モラルなどの勉強会を月に 1 度開催してきている。当該課題研究従事者のうち 1 名は、当初よりオブザーバーとして勉強会に参加している。

4. 研究成果

(1) 勉強会は基本的に月に 1 度 2 時間で開催され、メンバーの中の 1 名が当番幹事としてその日の講師役を務める。テーマは当番幹事が決定し、自分が関心のあることや、他のメンバーの疑問や質問を解決するための内容を取り扱うこともある。

当番幹事は基本的に輪番制であるが、メンバーの自主性が尊重されており、講師役を担う負荷や自信の度合いによって、複数で担当したり、担当を外れたりすることもあり、全員が必ずしなくてはならないという決まりはない。また、筆者のうち 1 名は輪番制の中に入り、もう 1

開催日時	平成27年11月5日(木曜日) 14時~16時30分
開催場所	大分市情報学習センター
当番幹事	■■■■■
テーマ	1・大分大学の学生さんとの意見交換 2・■■■■■先生の第1回勉強会について
参加者	■■■■■ 7名 (回不願) ■■■■■ (2名) ■■■■■ (他 3名)
内容	1・テーマ: 高齢者向けタブレット端末を活用した取り組み。 ゲーム感覚で気軽に覚えられるアプリケーションの開発について。 →今後もアプリケーション等案が浮かべば協力お願いします。 2・■■■■■さんの感想と今後の課題。 →事前に予定していた3割しか伝えることができなかった(■■■■■さん談) ・環境でインターネットがうまくつながらなかった。(事前確認要) ・受講者の機器の違い ・会員が内容を理解してなく補足説明できなかった (案)・受講者の機器を合わせ同じアプリをインストールしておく。 ・事前リハーサルを行い会員会員の意思疎通を図る。 ・受講者にアンケートを置くことで次回に活かせるのでは。
特記事項	外部の方よりお問い合わせを受ける等、活動の成果が期待されました。
次回予定	高齢者向け「タブレット出張出張講座」第2回目の準備、検討予定。
当番幹事	■■■■■さん (NHKアナキスト P28~P30お願ひします)
開催日時	・12月3日(第1水曜) 14時~
場所	・大分市情報学習センター

図 1 日誌の例

名は時折、当番幹事を務めている。メンバー数は、入れ替わりはあるものの9~12名程度であり、勉強会への参加人数も月によって異なる。

(2)月に一度開催される勉強会では、自己のICT活用力(理解・技能)の向上のための時間と、社会貢献活動(ICTボランティア)について検討する時間が設定されていた。平成27年4月から9月にかけて、この社会貢献活動を試験的にでも実施してみようという案が出され、10月には参加メンバーの一人が居住する自治会において「タブレットを体験しよう!」という第1回目の研修会(出前講座)が実施された。11名が参加し、メンバーの1名が主指導者となり7名が支援者となって研修会(出前講座)を実施した。講座では、地図、乗り換え案内、インターネット検索、Youtube、インターネットラジオなどを紹介し、実際に体験してもらった。

(3)11月の勉強会において、研修会(出前講座)の際に参加者が持参した機器はAndroidやiOSが混在していたこと、インターネット接続環境が不安定であったこと、メンバーの理解不足による操作説明の困難があったことが反省点として出された。そして、事前リハーサルをするなどメンバーの意思疎通を図る必要性も認識された。これを受けて、12月には今後の研修会(出前講座)の方向性が議論された。端末やアプリケーションの体験だけでなく自分が使ったのによかったのか、どのように便利だったのかなどの経験を語る時間を設けるというアイデアが出た。また、事前に紹介するアプリケーションをメンバー全員が自分のタブレットに設定して、操作方法などを共有しておくという意見も出された。さらに、第2回目の研修会(出前講座)を、第1回目とは異なる自治体において2月に開催する予定も提出された。

(4)この頃、タブレットやICTに関する理解力・技術力に優れたメンバーは1名で、他のメンバーに大差はないが、「自己の能力(理解・技能)では社会貢献活動をするに至らない」という思いが強まり重荷に感じるメンバーと、「全てを理解すること、できるようになることは不可能なので、今自分たちができることを伝えることが大事だ」という思いから、出来る範囲での活動を続けて行くことが自分の成長のためにも必要と考えるメンバーに分かれた。

(5)平成28年2月に、10月とは別の自治会において「タブレット体験講座」を実施した。第2回の研修会(出前講座)には、地域の高齢者5名が参加した。メンバーの参加は5名であった。参加した地域の高齢者らはある程度満足している様子であった。第2回の研修会(出前講座)を実施して、自分のスキルが社会貢献できるレベルではないと考え負担に感じて退会したり休会したりするメンバーも出た。

(6)平成28年3月に2月に実施した「タブレット体験講座」の反省会が持たれたが、出前講座の話し合いに時間を取られ、自分たちの勉強が進まないため勉強会に参加しても満足感が得られないことが最大の課題となった。メンバーの意識の乖離が顕著化してきたため、同年4月には筆者の1名が、「教えることと学ぶこと」について、研修会(出前講座)と自己の学びの向上との関係を紐解きながらリフレクションを行った。しかしながら、しばらくの間は、勉強会の停滞感が取り除けないままであったが、徐々に関心に沿った話題提供を中心とした勉強会のみでの活動へとシフトしていった。このころから、メンバーが知人などを勉強会に連れてくるようになり、内部の輪を広げ始めた。

(7)平成28年11月~12月にかけて、会に転換期が訪れた。11月までは、グループのまとめ役として会長、副会長を設置していたが、12月には、今後は会長・副会長などの役割を置かず、当番幹事制のみを残して、月に一度集まって勉強する新しい会とすることが、メンバー間で決定された。以降、平成31年3月まで、毎月勉強会が続いている。(研究機関終了後も勉強会は続いている。)

(8)新たな会はフラットな勉強会で、新しい人も入りやすく、メンバーも少しずつではあるが増えている。気軽に参加できる反面、来たり来なかったりも自由であり、欠席者が多い月もある。勉強会は「学び合いの場」だと感じますかとアンケートで聞いてみたところ、回答者数は6名ではあるが、5名が「そう思う」1名が「ややそう思う」と回答した。「やや」と答えたのは、勉強会に参加し始めたばかりのメンバーであった。

(9)自己スキルアップを目指した月1度の勉強会においてメンバーが相互作用しながらICTリテラシーの向上を図っているという点においては「高齢者-高齢者」による「学び-教え合い」の成果ともいえる。本研究の特徴と意義の半分は成功事例としてアクティブシニアの学習共同体による能動的な学びの姿を捉えることができています。一方、社会貢献活動のモデルや活動を通じたICTリテラシーの向上については、他者に教えることが自己の学びになるという意識には結びつかないことや、運営の負担による継続の困難さが、「高齢者-高齢者」による「学び-教え合い」における課題を示す事例となった。

(10)図1には、研究計画時のモデル予想図(左)と研究遂行後の結果の図(右)を示してい

る。これまで述べてきたように、ICT ボランティアなどの社会貢献活動では、運営の負担のみならず、自己の理解や技能に対する不足を意識化することにつながりやすく、他者に教えることが自己の成長につながるという自己実現の在り方を見取ることができなかった。その結果、ICT ボランティアなどの社会貢献活動は継続されることはなかった。しかしながら、自己のスキルアップを目指した月1度の勉強会においてメンバーが相互作用しながら ICT リテラシーの向上を図っている点においては、「高齢者-高齢者」による「学び-教え合い」の成功事例を捉えることができた。

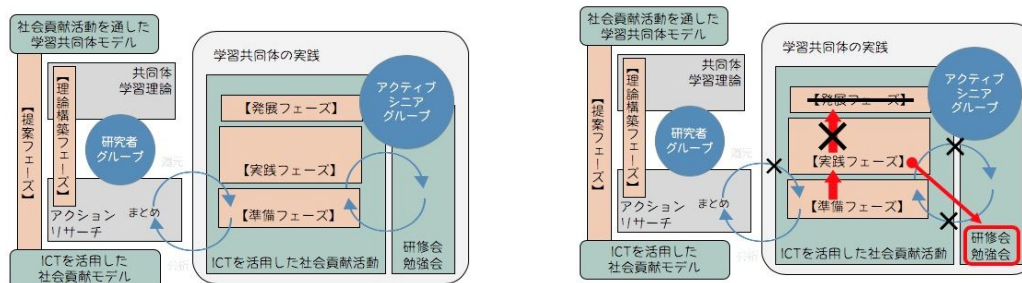


図2 モデル図による研究計画（左）と研究遂行後の結果（右）

(11) 本研究のモデルケースから見えてきたことは、次の通りである。

他者に教えることが自己の学びになるという意識には結びつかないことや、運営の負担による継続の困難さは、「高齢者-高齢者」による「学び-教え合い」における課題である。

自己のスキルアップ欲求と他者へのタブレットやスマートフォンなど情報携帯端末の活用を広めようとする活動とを同調させることが、「学び-教え合い」を成立させる要素となる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

竹中真希子, 伊藤大貴, 稲垣成哲 (2018) アクティブシニアによる ICT を活用した社会貢献および学習共同体の形成, 日本科学教育学会研究会研究報告, 33 (2), pp. 123-128 .(査読無)

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：稲垣 成哲

ローマ字氏名：INAGAKI SHIGENORI

所属研究機関名：神戸大学

部局名：人間発達環境学研究科

職名：教授

研究者番号 (8 桁): 70176387

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。